

〔論文〕

自由と解放を求める西村伊作

葛井 義憲

名古屋学院大学法学部

要 旨

近代日本国家の建設に多大な貢献をした人物のうちに、西村伊作、内村鑑三がいる。彼らは名古屋学院大学の前身、名古屋英和学校と縁のある者たちである。内村はこの学校で教鞭（1896年9月～1897年1月）をとり、「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」をモットーとして、「キリスト教証拠論」「地理と歴史」などの科目を担当し、生徒たちと一緒に農園を作り、豚や兎を飼って、世話をし、汗を流しあった。もう一人の西村（旧姓、大石）はキリスト教を生活の指針として暮らす父母とともに名古屋市で小学校に通い、この学校のチャペルへも出かけ、祈祷会へも参加していた。

本稿は名古屋英和学校と関係のある西村伊作の「数奇な人生」を考察し、彼の「自由と解放」への旅路から展開される言行を分析し、近代日本国家の歩みに与える意義を見いだそうとするものである。なぜなら、この世に生を受けた人間は彼らが置かれた家庭環境、生活環境、社会環境、自然環境などに少なからざる影響を受け、成長発達していく者たちであるからである。それ故、今回はこれらのことを重視しながら執筆する。さらに、これは小生の個人的事由であるが、2018年3月末をもって、長年、教員として奉職した本校を退職するにあたり、少しでも、本校に縁ある人の事績を表わしたいと願うからでもある。

キーワード：大石一族、名古屋英和学校、教会、スキートホーム、理想の世界

Isaku Nishimura seeking freedom and liberation

Yoshinori FUJII

Faculty of Law
Nagoya Gakuin University

発行日 2018年3月31日

1. 自然の中で育まれて

西村伊作の心の内に浮かび上がる風景の一つに、自然に囲まれている「情景」がある。建築家、西村伊作が1919(大正8)年に発行した『楽しき住家』(警醒社書店)に、父母に手を引かれて歩く、幼き日の伊作の姿が記されている。

自分の幼き時からの記憶を繰り出してみると、みなどれもこれも楽しかったことばかり呼び起こされて来る様な心持がします。(中略)私の幼い時の楽しい思い出は、常に自然の風景を呼び起こします。そして、その次には直ちに住居の有様、家屋や室内の様子を思い出します。(中略)私の最も古い記憶の一つは、多分私の二親にあるでしょう。手を引かれて田圃道を歩いて居る。青い田がやはらかに広がり、田を渡る風が耳たぶを摩擦して静かな音をたてゝ居る風景画です。(中略)少し成長してからのことでも、楽しい思ひ出には必ず、山や川や樹立や土手や海などの美しい風景が先づ心に浮かびます。(中略)山や川や森は、我々を愛して育てて呉れる自然であるやうに、建物も家屋も我々を守ってくれる自然であり、我々の此の小さい家に住んで居ると同時に此大きな山、川、森の間に我々が住んで居るのだと思ふと、此大自然も即ち我々の家であります(同書、1～3頁)。

いのちの源の創造主に抱かれているとの実感は伊作に安らぎと希望をもたらし続けている。この幼き日の光景は和歌山県新宮での日々、奈良県吉野郡下北山村での樹々に囲まれた生活体験より生まれてきたものであろう。この二つの場所で、彼は父大石余平、母ふゆと一緒に過ごした。彼の内に、父母と一緒に青々とした田圃道を歩いた心休まる時、また、樹々に囲まれた彼らのキリスト教会¹⁾(吉野郡下北山村)で、聖書を学び、祈り、礼拝で得た安らぎの時間が確かに刻まれていた。父余平が教えてくれる聖書の「創造神話」(創世記1～2章)は、伊作に創造主の意思のもとで作られた山、川、樹々などに抱かれ、いのちの源の創造主に常に育まれていることを「実感」させたことだろう。彼は建築家として、創造主が与えてくれた樹々を用いて「家屋、建物」を作るとき、それらが「神の愛の息吹」をいつも吐き、吸い、「神に守られ、支えられている処」なのだという感慨を抱くことができたであろう(拙論「西村伊作試論」(名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇)、1999年、9～10頁)。彼には、創造主の愛の息吹と、父母の慈しみに触れつつ、「神に守られた処」で憩えているとの確信めいたものを抱きつづけていたのだろう。

彼がかかるといふ思いをいさぐのには原因があった。彼は『西村伊作人生語録われ思う』(文化学院、1991年(復刻版))の中で、次のように表白している。

私は少年時代、日の丸をどうしても好きだとは思えなかった。私の父はクリスチャンであり、叔父は社会主義者であり、共にその宗教と主義のために死んだ。私は幼少の時から今度の大戦の終わるまで、一生の大部分を国賊とか、非国民とかいわれて生きてきた。そのために殺されそうになったこともある(56頁)。

明治になってキリスト者となり、宣教活動に励んだ父、大石余平、医者として、困窮者の医療活動に寄与した叔父、大石誠之助。その父は濃尾地震で即死し、叔父は大逆事件で処刑された。

歌人、石川啄木が「時代閉塞の現状」という評論を書いたのは1910（明治43）年8月であった。そしてこの上梓から遡ること5年ほど前、日本が日露戦争（1904年～1905年）で勝利した。つまり、これは日本中に「世界の一等国」との「自負」をいだかせる「時の到来」であった。かかる世情が胚胎する中で、啄木はこの評論の中で語る。「強権の勢力は普く国内^{あまね}に行亘つてゐる。現代社会組織はまた隅々まで発達してゐる。さうして其発達が最早完成に近い程度まで進んでゐる」（『石川啄木集』所収、筑摩書房、1970年、263頁）と。

そしてこの文章の内容を如実に表わす出来事が同じ1910年に起こった。それは「天皇の暗殺」を「計画」したとの嫌疑から生じた事件、「大逆事件」であった。そしてこの「事件」の被疑者の中に、西村伊作の叔父大石誠之助もいた。

日露戦争後、日本は天皇制国家の強権化と安定化へと益々向かい、人々の心の内から「批判精神」「理想」などを奪おうとし、国家への批判者を弾圧しようと目論まれた。しかも、この強権化、安定化は国内を越えて、「日韓併合」（1910年）にも現わされたように、アジアへの侵略をも行わしめるものであった。

かかる時代の趨勢のもとに生きた西村伊作は「個性の発展」「人間本来の自由」「万人の発達」「人類愛」を説くキリスト教社会主義的傾向をもつ大石誠之助を叔父にもち、また、聖書の言葉に強く心を傾けて聞くキリスト教伝道者、大石余平を父にもった。

近代化する日本社会で、理想を求め、夢を求めて生きるこの二人の姿は時には「危険」「風変わり」とも想われた。しかし、このような環境で育った西村伊作の言行は夢を見、理想を追いつづけることを忘れがちな現代人に有益なことを色々と語りかけてくれる。

2. 父と叔父との交わり

私は子供の時から西洋風の家が大好きでした。大きくなったら屹度、あゝ云ふ家に住みたい、白いテーブルクロスを掛けた食卓に美しい花を生けて、楽しい食事をしよう。軒には蔓草であゝ云ふ風に緑の日覆を作らう。カナリヤの籠のかゝつた窓から白いレースの窓掛を通して日光が射し込んでいる家に住みたいなどと思ひました。（中略）私の少年時代は身体が弱く、細長い青白い顔をして居たので、学校で皆んなに、お嬢さん、お嬢！ などゝ呼ばれたりしたのです。そう云ふ訳でもあらうか、私は家庭生活の事に興味を有つて居たのでした。（中略）また私は少年の時、時々宣教師などの家へ行つたりして、西洋人が日本風の家を借りて、それに手際よくカーテンやクッションやスカーフを用ひ、気持ちのよいサッパリした生活をして居るのを見て、その囚はれて居ない、自由な、楽しさうな住み方を感じたものです（『楽しき住家』、6～7頁）。

この伊作の『楽しき住家』は大石誠之助が「大逆事件」で逮捕され、幸徳秋水たちとともに処

刑（1911年1月）されてから8年程経った1919（大正8）年9月に出版されたものである。そしてこの文章は世間から「国賊，非国民」と非難されることに縮こまることもなく、伸びやかに書き記されている。伊作はキリスト教社会主義者誠之助の処刑後に表した、父大石余平との「懐かしく、楽しい日々」をこのように描いている。そして「洋館建設」を推奨し、その住み方を指南する書物は江湖から迎え入れられ、同年10月には速くも再版されている。

この好評を博した『楽しき住家』は伊作が1910、11年の痛苦を越え、また、1891（明治24）年10月28日の悲痛をも乗り越えて表わされたものである。

「洋館（＝西洋風の住宅）」に思いを馳せる伊作の心の内に、いつも父余平と母ふゆがいた。その父、そして母は濃尾地震（1891年10月28日午前6時38分）で亡くなった。その日、名古屋英和学校で、名古屋市内のキリスト者が早天祈祷会を開いていた。そして倒壊する学校の建物の中に伊作たちもいた。

彼は晩年に綴った『西村伊作人生語録われ思う』の中で、「私の父はクリスチャンであり、叔父は社会主義者であり、共にその宗教と主義のために死んだ」（同書、56頁）と記している。彼は父余平の死、叔父誠之助の死を「自分たちが信奉する精神に殉じていった」と捉え、その「生き方、死に方」を受容しようとしている。けれども、これはそれまでの数々の試練、艱難と向き合い、苦渋する中で辿り着いた境地であろう。なぜなら、近代日本の中に導入されたこの二つの「反権力思想」と父、叔父の「殉死」は容易に受け入れられるものではなかったからである。

和歌山県新宮の大石家に、この「反権力」のキリスト教が持ち込まれたのは1882（明治15）年、「愛なるキリスト教女学校」の梅花女学校で学んでいた余平の妹睦世が漢訳聖書を携えて帰省したことにはじまる。この大石家は代々漢学者や医者を出した「家柄」であり、また、睦世を大阪のキリスト教主義学校へ通わせたことから考えても、進取の気象に富む「一族」であったと思われる。

そうした進歩的な余平は睦世が梅花女学校へ帰った翌年、1883年5月、早くもカンバーランド長老キリスト教会宣教師J・B・ヘール（J. B. Hail）と一緒に南紀伝道に励んでいる。そしてこの南紀伝道で、余平は和歌山県南部の酒造業で、代々神官をも務めた「家柄」の山内量平に回心を迫り、そしてイエス・キリストに従うことを決断させた（佐波巨編『植村正久とその時代』第1巻、教文館、1976年復刻再版、733～742頁）。これほどまでの熱信を現わす余平であるが、彼の受洗日や彼の入信の動機は余り分からない（森長栄三郎著『禄亭大石誠之助』岩波書店、1977年、9頁）。けれども、余平の勧めで回心した山内量平は、量平の妹、横浜のフェリス女学校で学んだ季野たちの感化（季野は前年の1882年に植村正久（下谷一致教会牧師）と結婚）などもあって、遂には日本福音ルーテル教会最初の日本人牧師となった。

このように人々に回心を迫る余平の熱き信仰は、1877年に結婚した妻ふゆ、父増平、弟玉置西久、大石誠之助をキリスト教へと導いた。また、ふゆの弟、奈良県吉野郡下北山村の西村五郎作が亡くなった時（1886年）、その葬儀をもキリスト教で行わせた。

「文明開化」との希望あふれる言葉でも表わされる明治であるが、まだ、体制が変わって20年しか経たない南紀に、イエス・キリストの言行に打たれ、キリスト教が教える「世界」構築に励

む人々が現われた。下記の一文は伊作の追憶・聞き書きであるが、この頃の余平たち新宮の信仰者の交わりの様子を教えてくれる。

新宮の町では初めのうちはキリスト教に改宗した人が十人余りあった。その人たちは非常に仲良くして、本当の兄弟のように交わり、熱心にキリスト教を研究した。皆が心の眼がさめたような気持ちで、新しい生命を得た喜びによって信者たちの心がつながり、彼らはほんとうの肉親よりも親しい気持ちになって交わった(『我に益あり』紀元社, 1960年, 39頁)。

熱心で、素朴な信仰者の小さな群れが信頼をもって団結し、新宮で信仰を証しする情景が描かれている。彼らはこの信仰者の交流を通して、禁欲的(芝居見物禁止, 禁酒)に生き、「家」の宗教を軽視・排棄(仏壇から仏像や位牌を除去)するまでになっていった。しかし、かかる所業は1880年代の南紀で、彼らの親族や近隣の人々から受容・了解されるのは難しかっただろう。それよりも周りとの軋轢・混乱をもたらすことになったことだろう。

伊作の誕生(1884年9月6日)後、母ふゆの弟、西村五郎作が死亡したので、余平はふゆ、伊作と一緒に吉野郡下北山村へ移った。そして彼らは義母西村もとと暮らした。その時も、余平はこれまで学んだ聖書や宣教師の教えに従い、生活・宗教・精神改革(山林労働者に日曜休暇を与え、仏像・位牌を物置に移させ、いかなる財産も個人のものでなく、神のものであると公言)を断行した。その結果、彼らは西村家の親族から放逐された。

宣教師を通して知る「西欧の生活文化」に着目・導入し、聖書の言葉一つひとつに深い信頼を置いて生きる彼らはある意味で「日本の習俗・伝統・精神」を破壊する者たちだった。また、周囲から排斥・忌避の対象となるべき存在であった。しかし、一方、こうした拒絶・排除は余平たち信仰者を結束させ、信仰を強固にさせる要因でもあった。この折を回想した伊作の文章がある。

新宮におけるクリスチャンとしての私の父は他の信者たちとほんとうの兄弟のように仲良く暮らした。(中略)宗教的につながれた心で互いに愛し合い、他の人々が「あれは変わった人たちだ」と言って横目で見ると、自分たちは実にお互いの心がわかり合って仲良くできた(同書, 54頁)。

伊作はここに、信仰に基づく兄弟愛に満たされ、相互の信仰の成長を促し合う宗教的結社を描いている。それは心温まる励ましと癒し合いの「空間」であった。このユートピアを求める余平は、下北山村に教会を建てる(1887年)前に、故郷新宮に教会を立て(1884年)、また、下北山村で、西村家から放逐され、新宮へ戻ったのち、伊作の人間教育・発達教育を考え、新宮教会付属のキリスト教幼稚園まで設け(1888年)、新宮の幼児教育に寄与しようとした。さらに、余平たちが新宮を去って、愛知県名古屋市熱田に移転(1889年)した後の1890年には、事業(亜炭の採掘と販売)をしながら、自宅に「キリスト教講義所」の札を掛け、「この日本に『天国』をもたらそう」として、盛んな伝道をおこなった。

しかし、こうした熱心な余平の信仰生活、伝道生活は、一面、伊作には辛く、厳しいものでもあったようだ。彼は、熱田時代を思い出し、熱田は「宗教」の盛んな処であり、「保守的」であり、「新しいものに対して反感」をもつ土地柄であるため、父のキリスト教伝道はここでは嫌われ、迫害（「耶蘇を屠れ」「耶蘇は国賊」）されたと言う。また、熱田の小学校では、洋服を着た少年伊作は珍しく、「耶蘇の子供、耶蘇の子供」と囃したてられ、足をもって引きずりまわされ、顔を地面にこすり付けられる体験を何度もしたと述べる（同書、70～71頁、73頁）。

父の生き方は少年伊作に悲哀をもたらすものでもあった。けれども、伊作にとって、幼くして別れた父は敬慕の対象でもあった。彼は父を亡くした後、「父が大事にした精神や言行」を意識して覚え、守ろうとしている。また、伊作の心に甦ってくる父にまつわる思い出は、「緑の木の葉、赤いナンテンの実、つた」で、下北山村の教会でのクリスマスの飾りつけを行ったこと、新宮の教会で、大勢の人々とクリスマスに自家製のケーキを食べたこと。新宮教会員と一緒に天火でパン焼いたこと。それらは懐かしく、温かな情景であった。そして小声で讃美歌を歌いながら、仕事に精を出す父の姿もあった（同書、51～52頁、55頁）。伊作は活発に伝道する父よりも、のどかで、自由で、温かなキリスト者の群れの中で生きる父を懐かしく思い出す。

この父母を亡くした後、伊作と弟たち（下北山村で真子誕生、熱田で七分誕生）は奈良県吉野郡下北山村の祖母西村もんに引き取られた。そして伊作は1892（明治25）年、もんより家督（西村伊作となる）を相続し、地元下北山村の桑原尋常小学校へ通った。

尋常小学校卒業後、新宮の高等小学校へ上がり、中学は広島県の明道中学校（1898年）へと進んだ。それは叔母睦世が、その折、日本組合広島教会の牧師（井手義久、彼は1897年2月まで、日本組合愛知教会で牧会）夫人となって、当地で暮らしていたからである（葛井義憲他編『百年の歩み』日本基督教団愛知教会、1996年、144頁）。睦世と医者となってアメリカより1895年に戻った誠之助は山林富豪の当主となった伊作の将来と人格教育を慮り、父余平の信仰したキリスト教をもって人間形成を行おうと考えた。彼は広島の牧師館で従兄弟の井手義行（後の東京外国語学校校長、英文学者）とともに暮らし、礼拝に出席し、教会にくる青年たちとも交わり、英語や写真や絵画にも興味をもった。

こうした広島での生活を1903年に終えて、祖母もんの待つ吉野郡下北山村へ戻った。下北山村での彼は丸善（東京）から取り寄せた内外の書物を読みあさり、時には、新宮へおりて、叔父誠之助と「社会のこと、思想のこと、日露戦争のこと、家庭生活のこと」などを深更まで語り合った。この頃のことである。伊作は「平民新聞」第35号（1904年）に「平民文庫」行商の記事を綴っている。この記事によると、彼は新宮から京都まで、自転車と汽車で旅をした。自転車は新宮から和歌山まで、汽車は和歌山から京都まで。そしてその道中、「平民文庫」を売った。そんな伊作の「平民文庫」売りの記事の中に、次の一文がある。

自転車の上からは熊野の海岸は美しく見えました、だんだん和歌山まで来ますと日の丸の赤色がキック目にさわり号外の鈴がやかましく耳にひびき、汽車の中では戦争商人が賄賂の使ひ分けを説明しつつあるのを聞きました、踏切などに出征軍人を送る球燈の雨に打たれ

風に破れたる景色，淋しいやら凄いやら（「平民新聞」第35号平民社，1904年，7頁）。

彼は熊野の海岸線の美しさと残虐な戦争を象徴する「日の丸，号外の鈴音」を対照的に描き，戦争で儲けようとする商人と，雨風にさらされた「球燈」のように，悲しみを湛えつつ戦地へ赴く出征軍人を重ねて綴っている。下北山村の富豪，伊作の眼はたとえ，豪華な自転車などで「行商」するのは「本当の社会主義者ではない」と非難されても，平和と犠牲を強いられる人々の方へ向けられている。

余平たちから知らず，知らずに植えられたキリスト教精神，「人間の尊厳」「不義と暴力に対する反発」「生命への慈愛」などがこの記事の中に示されている。他方，誠之助たちからも教えられた「批判精神」あるいは「社会や人間の裏面と矛盾」に注ぐ眼は「残虐な戦争と美しい海岸線」「戦争商人と出征軍人」を対置して捉え，そこに，「強者や富者に甚だ都合」がよく，「弱者や貧者を犠牲」とする資本主義の矛盾，醜悪さがあることを見抜いている。

しかし，その伊作に「社会や人間の裏面と矛盾」を伝えた誠之助は1911年1月24日に処刑された。そしてこの国家からの弾圧は誠之助の周辺にも直接，間接に及んだ。誠之助の兄玉置西久は新宮町会議員及び東牟婁郡郡会議員の席を剥奪された。

こうした不条理な出来事，卑劣な迫害は「大逆事件」に関与した人々の周辺で少なからず起こった。けれども，そうした冷酷非道さが遺族とその周辺に向けられる中で，誠之助の葬儀（名称は「遺族慰安会」）が1911年1月28日，植村正久が牧する教会，富士見町教会でとり行われた。そこへ出席した者は植村正久，綱島佳吉（番町教会牧師），鶴沢総明（弁護士），井手睦世，玉置西久たち32名であった。その日，教会の外では，数名の警察官が警戒していた。

この植村のキリストの愛に基づく勇氣ある行為（処刑者の葬儀は禁じられた）は新宮にあって悲嘆にくれる誠之助の妻大石栄を深く慰めた。彼女はその後，伊作の友人である牧師で，作家の沖野岩三郎の指導のもとで，キリスト者として新宮教会で奉仕した。東京へ二人の子どもを連れて出た後は植村たちの世話で伝道者となり，富士見町教会で働くようにもなった（拙論「大石誠之助・栄，沖野岩三郎とイエス」（『名古屋学院大学論集（人文・自然科学篇）38-1所収）名古屋学院大学総合研究所，2001年，66～67頁）。

「大逆事件」は有形・無形の抑圧・迫害をその後の伊作にも与えた。「危険思想家」として刑事から執拗に尾行もされた。幼き日からのしかかる抑圧と迫害。伊作は西村家12代目の当主として，「大逆事件」以降，父の信仰，叔父の主義とある程度距離をおきながら，しかも，「自己」を見失わず，なるべく自分の納得ゆく生き方を見出さねばならなかった。なぜなら，彼は西村の「家」とその財産を種々の迫害や抑圧から守らなければならない役割を担っていたからである。

3. 堅牢で，尊重し合い，成長し合う，ホーム

我々が生れた来たのは，どう云ふ目的のためであるかは判りませぬが，我々はよろこび，楽しみを与へられて居ります。そして其のために生きて居る様に思はれます。苦しみを忍ぶ

生活も、真の楽しみを掘り出さうとするための様に見えます。真の楽しみを感じてそれを得るならば、自ら我々の生まれた目的に叶ふのであらうかと思ひます。私は家、住居を楽しい生活の基点として考へようと思ひます。(中略)我々は第一に我々自身と家族とのための城郭を作りたい、家庭の家、スキートホームのホームを作りたいと云ふ考へが起り [ます] (『楽しき住家』, 11 ~ 12頁)。

「大逆事件」後、社会からの直接、間接の圧迫は伊作に「堅牢で、お互いを尊重し合う、スキートホーム(=城郭)」づくり、つまり、「外敵」の侵攻にも負けない「空間」形成を考えさせていった。そしてじじつ、1914(大正3)年から西洋風の「堅牢で、創造主の愛の息吹が満ち渡る住宅設計」を行い、新宮で建築に取りかかった。この折、伊作の家族は妻光恵(1907年結婚)、長女アヤ、長男久二、次女ユリ、三女ヨネ、そしてこの住宅が完成する同月(1915年8月)に次男永吾が誕生している。多くの家族が支え合って暮らすことを望む彼らの「ホーム」は外の冷たく、厳しい圧迫から守られ、その「ホーム」の中で、家族一人ひとりが伸びやかに、楽しく、それぞれの能力を限りなく伸ばせる「世界」を築こうとした²⁾。それは強圧的な国家体制の枠組、天皇制支配から逃れられない彼らのある種の抵抗であり、また、可能な限りの自己防衛でもあった。

伊作は『楽しき住家』発行から2年後の1921(大正10)年に上梓した『田園小住家』(警醒社書店)の中でも、「幸福を求めることに何の遠慮もいらぬ」(10頁)と述べている。「スキートホーム」の発見と建設は「国賊」伊作に悲壮感を越えて喜びや楽しみを与え、伸びやかさまでももたらした。そしてこの伸びやかな明るさは父余平の素朴な、明日への希望に満ちた信仰、叔父誠之助が説いた、いかなる権力にも屈することのない「人間が本来有する自由」観にもあずかっていたと思われる。伊作もまた過去をふり返らず、明るく、希望にあふれる明日を信じ、それに向かって生きようとする。そしてこの明日への信頼は「外圧」に押しつぶされない「堅牢で、温かな」ホームに新たな希望を与えることができた。彼は『楽しき住家』で以下のようなことを語っている。

理想を追ひ求めることは人間の作られたやうに動くことで、決して悪いことではないと思ひます。だから我々がもつと理想の生活をしたいならば、力の及ぶ限り、他の圧迫に逆つて、自己のエネルギーを自分らしく発揮す可きものでせう。それには、今の社会を其のまゝにうけがひ、社会の習慣にこびり付いて居ては、何も出来ません。(中略)理想の社会を作らうとするのに、先づ小さい、出来得る位の大きさの社会から初めやう、それには、新しく一部落を組織しようと思ふのは当たり前順序でせう。(中略)私は経済的、社会制度的理想はあまり持ちませんが、住居の様式、生活の方法で、何か改革して見たいと言ふ心が多いのです。だから、私は新しい生活の村、新しい住家の村を作りたいのです。日本人がもつと新しい方法で生活し、愉快に、快活にそして野卑でない生活、趣味ある生活の出来る模範を示すために、どこかへ新しい村を作りたいのです (『楽しき住家』, 252 ~ 253頁)。

「スキートホーム」は「外圧」に耐え、さらに、その「外圧」を押し戻して拡大し、そしてそれは「新

しい村」へ発展してゆく。そしてそこに暮らす「村人」は豊かな趣味を楽しみ、日々を喜びにあふれて生活する者たちである。伊作はこの「新しい村」をもって「生きる喜び（＝生活改善）」を社会にいくらか示そうとした。そしてその希求は東京の神田駿河台に土地を購入した頃（1920年春）より少しずつ実現されようとしていた。

この購入前年の1919年5月に、下北山村の祖母もんは亡くなった。彼は購入した神田駿河台の土地にホテルを建て、そこで、芸術家や学者や小説家たちが気楽に滞在し、創作活動をしたり、団欒したり、また、講演会や音楽会が開けるようにと計画していた。そしてそこに集う面々はそれまでに交友関係のあった与謝野寛・晶子、石井柏亭、富本憲吉、有島武郎たちと、具体的な「作家」の顔が思い浮かんでいたことだろう。

しかし、「大逆事件」以降の伊作が描いた「新しい村」は叔父誠之助が心を寄せた「弱者・貧者」をこの「村人」の一人として数えていなかったようだ。伊作は新約聖書の中のたとえ話、「富める青年」（マタイによる福音書19：16～22）の苦悩や悲しみが痛いほど分かったことだろう。「富める青年」は「自らの富」を手元に残すか、また、それを捨ててイエスに従うか、と逡巡する。伊作もまた、この青年と同様、イエスの言葉に耳を傾けたいとの望みをもつ一方、祖母より受け継いだ莫大な「財産」を処分することはできなかった。そしてこの青年が悲しみながらイエスのもとを立ち去ったように、伊作もまたイエスと距離をおかねばならなかった。伊作は「罪」を別抉し、厳しく迫る創造主を恐れ、創造主と真っ直ぐに向き合うことをためらった。

「スキートホーム」が広がってできる「新しい村」はいのちの源の創造主に対しても、また、社会の内にある「弱者・貧者」に対しても距離をおく構えをもって実現しなければならなかった。

1921年4月、かかる痛苦を内にひめて始まる「新しき村」の具現化の一つが、伊作を校長とする文化学院として創立された。その場所は彼がホテルを作ろうとした東京の神田駿河台であった。

伊作は長女アヤが高等女学校への進学が近づく頃より、高等女学校教育のあり方に疑問をもつようになっていた。その一つは彼の新宮の自宅から見える新宮高等女学校の女生徒の様子であった。彼女たちは学校の正門の出入りの際に、いつも正面玄関の奉安室に向かって丁寧にお辞儀をする。そこに、天皇・皇后の「御真影」があることを知ってか、知らずか、彼女たちは学校から命じられたとの理由で頭を下げつづけた。こうした光景を見るにつけ、彼は高等女学校教育が自由も、個性の尊重も、個人の能力の成長発達をも抑制して、画一的・機械的教育を推し進めていると判断し、そのことに憂慮しなければならなかった（『愛と叛逆』文化学院出版部、1971年、428～429頁）。幼き日より、父や叔父から、「人間の尊厳」「個性の発展」「人間自然の自由」「万人の幸福」「人類愛」などの大事さを教えつづけられた伊作にとって、この高等女学校教育は受け入れ難かった。

文化学院創立の前年、1920年夏、彼は長野県杏掛の別荘で与謝野寛・晶子たちと一緒に過ごした。その折、伊作は与謝野夫妻にアヤの高等女学校進学を相談した。すると、彼らは伊作が「アヤのための学校を設立したらどうか」と勧めた（同書、40～41頁）。その勧めが契機となって、文化学院が誕生した。校長は伊作。そして校長を補佐する学監は石井柏亭と与謝野晶子。学監の顧問として、外国文学に戸川秋骨、日本文学に与謝野寛、音楽と舞踏に山田耕筰が就任した。

この陣容からも分かるように、芸術創作を重視し、個人の創造能力を自由に、思う存分伸ばそうとする学科内容であった。この他に、語学（英語・フランス語）と科学も重視した。また、この学院の精神的糧となる「道徳的・宗教的教育」推進の「精神講座」は阿部次郎、有島武郎、吉野作造、寺田寅彦、木下杢太郎、北原白秋などを講師として迎えた。この開学時、教師は40人ほど、生徒は12歳位を中心とした女子が35人ほどであった。

文化学院主任の河崎なつ（婦人運動家、後に日本母親大会委員長など）は文化学院草創期のある日の情景を「学校の朝」というタイトルの文章に綴っている。彼女によると、有島武郎が「文学」の講義で『生まれ出づる悩み』を講じ、与謝野晶子は森鷗外訳の『即興詩人』を講堂で朗読して、生徒たちに聞かせている。イギリスのコテージ風の校舎と、芝生が引きつめられ、種々の草花や木々に囲まれた庭で、3, 40人の女生徒が自由な服装で学んでいる（同書、43頁）。

伊作の堅牢で、温かなホームを拡大した「理想の村」の一部が文化学院として出現した。創作活動を尊ぶサロンのようなホテルづくりは家庭的で、自由と芸術を大事にする学校の設立へと変わっても、伊作にとって、それは問題でなかった。彼は1927（昭和2）年に出版した『我子の学校』（文化生活研究会）で、「我々の理想の行い易い」のは「家庭」について小さな団体の「学校」である。学校に所属する人々は礼儀正しく、愛の心に満ち、品位がある存在であり、また、真剣に、誠実に、良識をもって生きる人たちであると語る（230～232頁）。

彼は文化学院の教育実践、その経営に参与する中で、学校（＝文化学院）は彼が描く「スポートホーム」と「理想の村」の確かな仲立ち、「理想の村」実現に向けての信頼しうる媒体であるとも確信した。

堅牢で、温かで、相互に育みあうホーム（これは家屋（house）でなく、家庭（home）である。）は「外圧」に負けず、抑圧・迫害を愛と平和に変えていく力を有していると思なせるところまで成長しようとしている。彼は如上の『我子の学校』の中で、教育の使命は先ず「人間性の発達・向上」、そしてそれをもって「立派な国家」建設を行うことだと語る（58頁）。幼き日から抑圧と迫害にさらされ、それ故に、益々自由と成長と幸福を求めた伊作は抑圧の象徴でもある天皇制支配の中で、自らの「理想の空間」の一つとして、小さく、清楚で、喜びに満ちた文化学院を築き、それを維持・運営していった。そして彼はここで、自主自立の人、愛と平和と真理に生きる人、品格と静謐と誠実を尊ぶ人を育てようとした。「反骨の人」伊作は現実の「政治的抑圧」に対し、人格教育、芸術・倫理・宗教の尊重、生活の改善を行うことをもって向き合おうとした。

4. おわりに

伊作は1943（昭和18）年4月、「不敬罪」の嫌疑で拘引された。理由は彼が非戦論者であり、皇室に対する不敬の徒と思なされたからである。彼は文化学院で戦争と戦時体制に対する雑感をしばしば述べた。「アメリカ、イギリスを敵とすることは日本人の大きな損出」「大東亜が結束して白人からの圧迫からのがれるのだという〔大東亜共栄圏建設の〕理屈はみな日本の利己主義」（『我に益あり』、360頁、366～367頁）。「世の中があなたたち〔文化学院の学生。文化学院は

1925年に男女共学となり、また、大学部（本科・美術科）も新設した。]を戦争の方に引っ張ろうとしている。だから、わたしはあなたたちを反対の方向へ引っ張ろうとしているのだ』（『愛と反逆』、340頁）と。

こうした辛辣・率直な発言、時勢に追従しない「自由主義教育」、「軍国主義教育よりも人間性の発達教育に邁進」を主張・実践する教育姿勢は天皇制ファシズムには棘であった。その棘を抜くために、伊作は巢鴨拘置所に拘禁された。そしてこの拘禁（1943年10月まで）の間、差し入れられた讃美歌の中の第285番を毎日歌った。「主よ、み手もて／ひかせたまえ／ただわが主の／道をあゆまん／いかに暗く／けわしくとも／みむねならば／われいとわじ。」

独房の中で、圧迫をうけつつ、小さな声で、1人で歌う讃美歌第285番は「赦しの神」「愛の神」が身近にあり、そこに包まれていることを彼に実感させるものであった（Henri J. M. Nouwen, *Life of the Beloved* (New York: A Crossroad Book, 1992), pp. 97～99)。彼のこれまでの日々は日本が平和で、楽しい「理想の世界」に生まれ変わることを創造主に祈り、務めることでもあった。

創造主に赦されつつ、「愛のキリスト」を慕い、「1人びとりはかけがえのないものだ」と尊重され、いのちの源の創造主よりこの世に送り出されたいのちあるものが「輝き、喜び、祝されて」生きられる「世界の構築」を求めて生き続けた西村伊作はこれまでほとんどキリスト教史で省みられなかった。それは西村の人生にまとりつき「悲惨とも思われる出来事」「多くの富の所持者」「個性的で、自由に生きようとする歩み」は創造主とともに、謙遜に、誠実に、清貧に生きる「典型的な信仰者」の姿から「逸脱」しているかのように見なされたからであろう。彼の日々には捺された烙印は、「危険思想家」、「弱者・貧者と距離を保つ富豪」、「神中心でなく、人間中心の生き方を求める自由勝手な、不遜な輩」だと、悪意をも帯びたものであった。しかし、こうした風評は彼の実相を捉えきれているのだろうか。

たとえ、伊作が「峻厳な神」と向き合えなくても、彼の中にも、熱い神への祈りはあり、聖書と格闘し、キリストを慕い、赦しをこう生き方はあった。熱心な信仰者の父余平と過ごした日々、叔父誠之助の「弱者への愛（「貧しい人々」から薬価を請求せず、また、彼らから払われる小額の謝礼も快く受け取った。）」（大石誠之助著「国体論」二（「熊本評論」15号所収）熊本評論社、1906年、3頁）」などは一生消えることなく、彼の人生の節目、節目で思い出され、生きる指針となっていたはずだ。そしてこの伊作の苦悶、理想を求める歩みや、キリストを見上げ、赦しをこいつつ、明日へ向かって歩ませてほしいとの祈りは、自己嫌悪に苦しみつつ、苛酷で、矛盾に満ち、激しい競争へと駆り立てるこの世にある人々に生きる力や慰め、希望を与えることだろう。すべてのいのちは祝されてこの世に送られている。自らを大事にし、他の存在をも愛おしむ心、自利利他の心を備えて、この世で生を紡ぐものたちである。

注

- 1) 西村伊作の周りには教会があった。伊作が誕生したのは1884（明治17）年9月6日である。父大石余平が自らの土地をささげて、和歌山県新宮に、プロテスタントの教会を献堂したのは1884年6月である。また、奈

良県吉野郡下北山村に、父母と一緒にその地へ移った1887年に、ここにも、教会が誕生した（J・B・ヘール著『日本伝道二十五年』大阪女学院、1978年、173頁。西村伊作著『我に益あり』、45頁）。下北山村の教会でのクリスマスの思い出を、伊作が記しているので抜き書きしておこう。「その〔下北山村〕教会は大きなケヤキの木が枝を張った下に建てられ、クリスマス・カードの絵のようであった。私の小さなときの初めての記憶の一部として覚えているのは、その教会におけるクリスマスである。父はヒゲノカツラという蔓草を採って来て天上のぐるりへ張り回し、ナンテンの赤い実を持って来て、ほとんど自然のものばかりで装飾をした。今日のようにクリスマスツリーへ豆電球をつけるようなわけにはいかなかった。そしてお祝いのお菓子をつくり、村人を集めて皆に配った。私はそのときもらったお菓子の色や形を今でも思い出すことができる。村人はそれが非常に珍しい祭りだと思った。」（『我に益あり』、46頁）。

- 2) 人々に与える家庭、ホームの意義を提示したのは西村伊作以外にもいた。1903年に、内村鑑三は『聖書之研究』に「家庭の建設」という論説をのせている。「家庭とは勿論家屋のことではありません、勿論家庭を作るには家屋は必要であります、然しながら家屋があればそれで家庭が出来たとは言はれません、家屋は物でありまして家庭は精神であります、此事を知る事が家庭を作る上に必要であります。（中略）家庭とは神より愛を受けた者が其愛を相互に交換する所であります（『聖書之研究』第38号聖書研究社、1903年、46～48頁）。